

オランダ雑記

最初の海外赴任地は、佐倉にゆかりの深いオランダのアムステルダムでした。生まれも育ちも北海道の私にとって、山が無いことを除けば、オランダは、田舎の風景も気候も故郷に似ていて、とても親近感のもてる場所でした。



ササキ アキヤ
佐々木明也さん



「世界は神がつくったが、オランダはオランダ人がつくった」という言葉があるように、干拓地を作って国土を拓けてきたオランダは、まさに「偉大な小国」です。

ところで、オランダ北部に「フローニンゲン」という街があります。

『不老人間』、なんと『シルバー』には羨ましい!

でも、Groningen(これで「フロー ンゲン」と読みます)は老人の多い街ではなく、活気に満ちた大学都市で、そのため人口の平均年齢は国内最年少といわれています。市街地には、歴史的建造物のほか、お洒落なショップやブティックなどが建ち並ぶ、いわば『若き不老人間』なのです。



家の近所にあった風車と
レンブラントの像
(と40年前のわたし)

おもしろい名前の街をもうひとつご紹介します。国際司法裁判やオランダ王室などがある行政都市ハーグの近く、北海に面した所に『スケベニンゲン』と読めなくもない Scheveningen(実際は「スヘフェニンゲン」と発音します)という、いかにも日本人に受けそうな名前のリゾートがあります。

長い砂浜の一角にヌーディストビーチ、近くにミニチュアの街マドローダムなどがあります。「sch」の発音がドイツ人とオランダ人とでは異なることから、第二次世界大戦時にはドイツのスパイを識別するためにスヘフェニンゲンを発音させることが行われたといわれています。

季節はもうすぐ春。2月の最終週には「クロッカス休暇」という学校の休みがあります。花の国オランダならではの、なんとも可愛い名前の春休みです。

※この記事は、会報誌『おしゃべり広場』(『ハローシニア佐倉』の前身) 第54号(2019年2月)に寄稿したものです。